

2023年度SPIO Award

SPIO Award は、毎年 Auris Nasus Larynx (ANL) に掲載された原著論文の中より、優秀原著論文1篇に対し、その著者に賞状と賞金(50万円)を贈呈しています。(ただし、筆頭著者は45歳以下) また、受賞者には日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会において講演の場が与えられます。これは平成13年から始まり令和4年までに23名の受賞者を選出しました。

2023年度は、掲載された原著論文90編の中から候補対象となる50編を英文誌委員会のメンバーで審査し、最終的に SPIO Award 候補論文として6編が推薦されました。その後 SPIO 選考委員会および理事会で選考した結果、大阪大学麻酔集中治療医学教室 田中 愛子 氏が選ばれました。

Aiko Tanaka : Association between tracheostomy and survival in patients with coronavirus disease 2019 who require prolonged mechanical ventilation for more than 14 days: A multicenter cohort study.
ANL Vol.50, No.2, 276-284, 2023

令和4年度曾田豊二SPIO奨学金受領者(シカゴより)

福井大学 木戸口正典氏

お世話になっております。私は2023年春より福井を離れ米国シカゴにある Northwestern University (ノースウェスタン大学) へ研究留学させていただいています。シカゴはアメリカの中西部に位置する街で米国第3の大都市になります。冬は氷点下20度になることもありますが、梅雨はなく夏はとても過ごしやすい気候です。現在、留学して1年ほど経ったところですが近況を報告させていただきます。

ノースウェスタン大学は1851年創立で歴史は長く、過去に多数のノーベル賞受賞者を輩出している名門私立大学です。私はその中で医学部の Allergy and Immunology 部門に属する Atsushi Kato 研究室にて副鼻腔炎の撲滅を目指して日々奮闘しています。ノースウェスタン大学は副鼻腔炎の研究に関してとても先進的な研究施設です。学内に臨床医(耳鼻科、アレルギー科など)と基礎研究者が共同運営する Sinus Allergy Center があり、その中にそれぞれ独立した PI が所属しながら基礎研究からトランスレーショナルリサーチまで行われています。そのため、研究内容は基礎研究から臨床研究まで多岐にわたり、この10年間で240本の副鼻腔炎に関する論文を報告し、2023年の研究ランキングでは副鼻腔炎において世界に最も影響力のある研究施設として世界第1位にランクインされています (<https://www.expertscape.com/ex/sinusitis>)。

私個人の研究としては、副鼻腔炎の本質的な病態解明を目標に、難治性の副鼻腔炎に好発する鼻茸や血液など患者組織を用いた基礎研究を行っています。日本でやってきた研究の延長線上にあるテーマではありますが、求められているレベルが高く、必死に食らいついていくことで少しずつ成長できていることを実感しています。そのほかの活動としては、Allergy and Immunology 部門では学内の発表会と学外から招待する講演会がそれぞれ週1回ずつあり、それに加えて Sinus Allergy Center としてのミーティング、抄読会などが定期的に行われています。まだまだ未熟な英語力やプレゼン力に加え、質問のレベルの高さに日々圧倒されていますが、この素晴らしい環境にはとても満足しています。

私生活についてですが、私は妻と2歳になる娘を連れての渡米でした。実は、渡米時に妻は第二子を妊娠中であり帯同してくれた妻にはとても苦労かけました。周囲の手厚いサポートもあり無事に出産を迎えることができ、昨年の夏は一生忘れられない思い出となりました。また、シカゴ市内には医学部だけでもノースウェスタン大学、シカゴ大学、イリノイ大学、ラッシュ大学などがあり、日本人を含む多数の研究者らが暮らしています。休日はラボのメンバーや友人ファミリーと集まり季節のイベントに参加するなど、私生活を通して日本では学ぶことができなかった多様性や国際的な視点について学んでいます。また長女は地元の Preschool に通い始め、自分以上に英語や多様性を学んでいます。異国の地であるため小さなトラブルは日常茶飯事ですが、家族一丸となって充実したシカゴ生活を送っています。

最後に、このような貴重な留学の機会をご支援いただきました国際耳鼻咽喉科学振興会ならびに曾田豊二 SPIO 奨学金に心より感謝申し上げます。帰国後はこの経験を日本に還元し、また日本とアメリカの架け橋となるような存在になれるよう引き続き精進して参ります。



Kato 先生(真ん中)、筆者(右から3番目)とラボメンバー



ミシガン湖からのシカゴの街並み